The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「～はおろか、～」構文の歴史 ： 副詞節を構成するコピュラ文 |
| Author(s) | 北﨑, 勇帆 |
| Citation | 語文. 2024, 122, p. 134-120 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/98216 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 「～はおろか、～」構文の歴史

## ――副詞節を構成するコピュラ文――

北　﨑　勇　帆

### 1. 問題の所在

本稿では、（1）のような定型的な構文を「～はおろか、～」構文と呼び、その歴史について扱う。

（1）　a. このサイトでは撮影地は県名はおろか、地方も明かさないし聞かないことになっている。貴重な野草の盗掘を防止するためなのである。

（Yahoo! ブログ［2008］OY03_04415,4350）

b. 梅雨らしいジメェ～っとした陽気。職場内はクーラーはおろか、除湿もかからないので、もう劣悪な環境と化しています。社員の勤労意欲を高めるためにも、空調は常時運転できるようにしといてよ。

（Yahoo! ブログ［2008］OY14_08105,430）

この構文の中心的な構成要素である「おろか」について、辞書類や河辺（1960）・我妻（1991-1995）による語誌的記述によれば、「おろか」の意味は大きく以下の 2 つに分かれ、前者が古く、後者は後発的であるという。そして、中世以後には（2a）を「おろそか」が、（2b）を「おろか」が担うようになる形で、意味が分化していく。

（2）　a.「（認識が）不十分」の意（≒現代語の「おろそか」）

b.「頭の働きがにぶい」の意（≒現代語の「おろか」）

（3）　a. おろか〈於呂可〉にそ我は思ひし乎布の浦の荒磯の巡り見れど飽かずけり　（万葉集・巻18-4049・10-万葉0759_00018,4890）

b. 三蔵ノ宣ハク、「汝ヂ等極テ愚也。我ガ敬フヲ『様有ラム』ト不思シテ謗ルガ、知ノ無キ也」

（今昔物語集・巻11-14・30-今昔1100_11004,9500）

前者（2a）には、特に、「（「…と言えば」「…と言うも」「…とは」などの後にきて、その形容、その表現が不十分であるさま）…と言うのでは不十分。…どころではないさま。」（『日本国語大辞典』第 2 版、「おろ-か」【愚―・痴―・疎―】の項）、「表現が不十分であるさま。言葉が足りないさま。多く「～と言へばおろかなり」「～とはおろかなり」などの形で、「～という言葉では言い表せないぐらい～である」「極

めて～である」などの意を表す。」（『古語大鑑』、「おろか」【愚・疎】の項）の用法があり、（１）の「～はおろか、～」構文と関わるのは、この意であろう。ただし、一般的な「おろか」が主文末で「おろかなり（・だ）」などとして終止するのに対し、「～はおろか、～」構文の場合、「おろか」が単独で中止し、従属節を構成する点に大きな異なりがある。(1)

副詞節・等位節の成立の過程にはいくつかのパターンがあることが知られ（山口1980：第15章、仁科2016など）、稿者は暫定的に、そのプロセスが、①「関係節と主節との関係の再分析」（石垣1955「が」、吉田2000「ほどに」など、竹内2007も参照）、②「並置された節（文）の再分析」（高宮2004「やら」、北﨑2018・2019「命令形式の条件形式化」）、③「既存の形式の複合・再分析」（小林1979「ならば」、西田1978「けれども」など）の３種に集約されるものと考えている。この「～はおろか、～」は、内容語の「おろか」に出自するものではあろうが（すなわち、③ではない）、節末に助詞を持たず、連体修飾を受けるものでもなく（①に反する）、完結的な節でもない（②に反する）という点で特異であって、その出自を考えるためには通時的な調査・分析が不可欠であろうと思われる。

## 2. 調査

上に述べた問題設定のもとで、「～はおろか、～」構文の発達の過程を検討する。その際、「おろか」類が現れる環境をどのように考えるかが問題となるので、調査の前に本稿の分析の枠組みを示しておく。

### 2.1. 分析の枠組み

この構文の現代語における機能は、澤田（2006）、服部（2006）、藤田（2013）などに詳しい。典型的には、冒頭の例のように「AはおろかBもVしない」という構造を取り、（1a）においては、「撮影地の県名」（A）だけでなく、それを包含する「撮影地の地方」（B）も公開しないこと、（1b）においては、「クーラー」（A）だけでなく、（おそらく、クーラーに比して電気代がかからない）「除湿」（B）の運転も行われないことが示される。このとき、A, Bの２項は、「Aが成立すればBも成立する」という関係にあり、「Bが成立しない」ことを示すことで、含意される「Aの成立」も否定されることになる。

また、澤田（2006）にも言及があるように、英語においては let alone 構文（Fillmore et al. 1988）がこの「～はおろか、～」構文に類似した性質を持つ。

（４）　A: Did the kids get their breakfast on time this morning?

B: I barely got up in time to EAT LUNCH, let alone COOK BREAKFAST

（Fillmore et al. 1988: 512）

Fillmore et al.（1988）はこのlet alone構文において、let alone節の内容は情報価値が高く、主節の内容は談話上の関連性が高いことを指摘しており（Toosarvandani 2009, Cappelle et al. 2015も参照）、「～はおろか、～」構文においても同様の関係性が成り立つ。[(2)] 次例（５）では、３行目までの中心的な話題である「歌詞の対訳」が「おろか」文の主題として導入され、その「対訳」が「入っていない」ことの主張とともに、談話上の新情報として、「歌詞カードが入っていない」ことが示されている。[(3)]

（５）　０：［記事タイトル］あ～歌詞カード

１：ポール・マッカートニーの新譜『エレクトリック・アーギュメンツ』を購入しました。

２：今までの「ファイアーマン」シリーズはボーカルが無かったので輸入盤を購入してきましたが

３：今回はボーカル入りと言うことで$_{A}$歌詞の対訳が欲しくて国内盤（¥2,520）を購入

４：しかし！開封してビックリ、$_{A}$対訳は愚か$_{B}$歌詞カードも$_{V}$入っていません（汗）

５：帯にちっちゃく書いてある注意書きを読むと

６：「歌詞・対訳は割愛させていただきます。」だって！

７：それを知っていればわざわざ高い国内盤じゃなくて

８：アマゾンの輸入盤なら￥1,530、米国アマゾンなら$9.45で買えたのに（涙）

（Yahoo! ブログ［2008］OY14_31785,1380）

すなわち、現代語の「～はおろか、～」構文は、談話上関連性のある要素Ａを主題化し、そのＡとＶが結びつくことだけでなく、ＢとＶとが結びつくことを、より強い主張として提示するものであると言える。

以上の議論に基づき、本稿では、「～と言えばおろかなり」や「～はおろか、～」が現れる環境を包括的に考えるために、その構成要素を以下（６）の４つに分けて分析する。

（６）　$_{①}$Ａ $_{②}${は／といえば／とは／…} $_{③}$おろか {∅／なり／…} $_{④}$Ｂ

①主題化される要素：動詞文、形容詞文、名詞句など

②主題化の方法：助詞「は」、発話・思考動詞など

③「おろか」が取る形態：「おろか」単独、おろか＋コピュラなど

④対比される後続要素の有無

具体例を（７）に示す。(7a) では、①形容詞文が、②発話動詞の条件形によって主題化され、③「おろか＋コピュラ（終止形）」で終止し、④対比される後続要素は現れない。(7b) では、①「紫色」という名詞句が、②助詞「は」によって主題化され、③「おろか」単独で中止し、④対比される後続要素「樺茶色」が現れる、という構成要素を持つものとして考える。

（７）　a. ①いと心細し②と言へば③おろかなり。④…［歌］

（源氏物語・明石・20-源氏1010_00013,20180）

b. ①紫色②は③おろか、身内が④樺茶色になるとても君故ならば厭はぬ

（大経師昔暦・51-近松1715_23001,17670）

## 2.2. 中古

上に引いた通り、古代語の「おろか（なり）」には、「～と｛言えば・言うも｝おろかなり」「～｛とは・とも｝おろかなり」といった定型的な構成で「～と表現するのでは不十分である」ことを述べることで、その程度が甚だしいことを示す例がある。これが現れるのは中古以降のことであり、主題化の方法には (8a)「～と言えば」のような引用動詞の条件形、(8b)「とは」「とも」など、引用の形式が用いられる。

（８）　a.「この風いましばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しと言へばおろかなり。［…歌］（源氏物語・明石・20-源氏1010_00013,20180）

b. 女、あさましく、わびしうかなしうて、ただ泣きに泣かれて、いかに聞きたまひたるならむ。いみじとはおろかなり。

（落窪物語・巻１・20-落窪0986_00001,294100）

主題化される要素については、現代語の「～はおろか、～」が名詞句を項として取るのに対し、当期の「おろか（なり）」は（８）の「心細し」「いみじ」といった形容詞述語文や、以下の例（９）のような、何らかの尺度（ここではそれぞれ「可愛がる」「泣く」度合い）を持つ動詞文を引用節として主題に取る。

（９）　a. これ二人をなむ、「父［権帥］かなしくすとはおろかなり」と言ひける。

（落窪物語・巻４・20-落窪0986_00004,143310）

b. 北の方、＜今宵なむ、帰りたまひなむ＞とする。［四の君が］出でたまひけるを見て、母北の方、泣くとはおろかなり。かなしうする女になむありける。（落窪物語・巻４・20-落窪0986_00004,188180）

このことと関わって、当期の「おろか（なり）」には、対比される対象が後続部に明

示される例が見出されない。すなわち、これらの「おろか（なり）」は、ある尺度上の度合いそのものに言及して「そのように表現するのでは不十分である」ことを表すもので、例えば、「いみじ」「泣く」では不十分であることを述べれば、その様態が通常の「いみじ」「泣く」よりも甚だしいことが十分に推論可能であるので、対比される要素も現れ得ないものと考えられる。[(4)] このことは、当期の類義表現である「さら（なり）」が名詞句を主題に取る場合には、下例（10）のように後続部に対比される要素が現れることと対照的である。[(5)]

(10)　a. とくゆかしきもの　［…］人の子生みたるに、男女とく聞かまほし。よき人さらなり。えせ者、下衆の際だになほゆかし。除目のつとめて。かならず知る人のさるべきなきをりも、なほ聞かまほし。

（枕草子・153・20-枕草1001_00153,510）

b. よろづの事よりも情あるこそ、男はさらなり、女もめでたくおぼゆれ。

（枕草子・251・20-枕草1001_00251,180）

c. 大臣の御はさらなり、親めきあはれなることさへすぐれたるを、涙落として誦じ騒ぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。　（源氏物語・少女・20-源氏1010_00021,36860）

### 2.3. 中世前期・後期

院政・鎌倉期にも、中古の「～と言えばおろかなり」と同様の例が引き続き見られる。(11) に形容詞文、(12) に尺度を持つ動詞文が主題化される例を示す。

(11)　a. 然レバ、生ナンズルニヤト思ニ喜キ物カラ、不堪敢心ヲ静テ見レバ、目ヲ細目ニ見開タレバ、［甥子が生きているのを確認できて］喜シトモ愚也ヤ。　（今昔物語集・巻26-５・30-今昔1100_26005,44280）

b. かくて万の事、たのもしといへばおろかなり。

（宇治拾遺物語・巻１-18・30-宇治1220_01018,36220）

(12)　引き倒されぬべきを、構へて踏み直りて立てれば、強く引くともおろかなり。引き取られぬべく覚ゆるを、足を強く踏み立てければ、かたつらに五六寸ばかり足を踏み入れて立てりけり。

（宇治拾遺物語・巻14-３・30-宇治1220_14003,6370）

前項では、中古の「おろか（なり）」が尺度上の度合いに直接言及するために、後続部が示されにくいことを述べたが、中世前期の以下の例（13）は、前項の例と同じように形容詞文・動詞文を主題に取るものの、対比される要素が後続部に現れているようにも解釈できる。(13a) では、「縛っておく」と描写するだけでは不十分で

あることが述べられた後に、（単に縛り付けておくだけでなく）「四肢を磔にした」状態であることが描写されており、同様に、（13b）では、「恐ろしい」に対して、その基準を越えて「呆れている」[(6)]ことが、（13c）でも「大きい」に対して、切り口が一般的な蛇の太さを越えた「一尺」ほどあることが述べられる。いずれの例においても、後続文の方が重要な情報として提示されており、現代語の「～はおろか、～」構文と共通する性質が見出される。

（13）　a. 郎等本ヨリ［雑色を］憑ム心ニテ、拈ム（シタタ）ナド云ヘバ愚也ヤ、四ノ枝ヲ張リ付タリ。二ノ足ニハ吉ク械ヲ打テ、二ノ手ヲバ、上ニ大ナル木ヲ渡シテ、其レヲ␣（欠字）カセテ縛リ付ケツ。髪ヲバ木ニ巻キ付テ、其ノ上ニ多ク昇セ居ヘテ令守ム。　（今昔物語集・巻13-18・30-今昔1100_13038,2370）

b. 「然ハ何事カ云ツル」ト問ヘバ、妻、経方ガ彼ニテ云ツル事ヲ一言モ落サズツラ〳〵ト云フニ、経方ガ夢ニ見ツル事ニ露違ネバ、経方、怖シトモ愚也ヤ、⇦␣（欠字）⇨テナム有ケル。

（今昔物語集・巻31-11・30-今昔1100_31010,9160）

c. その時、足にまとひたる尾を引きほどきて、足を水に洗ひけれども、蛇の跡失せざりければ、「酒にてぞ洗ふ」と人のいひければ、酒取りにやりて洗ひなどして後に、従者ども呼びて、尾の方を引き上げさせたりければ、大きなりなどもおろかなり。切口の大きさ、径一尺ばかりあるらんとぞ見えける。

（宇治拾遺物語・巻14-３・30-宇治1220_14003,8810）

なお、中古には「おろか」が名詞句を取る例が見られないことを述べたが、当期には、「あさましさ」のような名詞化した形容詞を中心として、「N（は）言うもおろかなり」という形で、名詞句が主題化される場合がある（後掲15、16bも同様の例）。

（14）　a. 行幸の儀式のあさましさ、申すもなかなかおろかなり。

（高野本平家物語・巻８・30-平家1250_08010,31190）

b. 十善帝位の御果報申すもなかなかおろかなり。雲上の竜くだって海底の魚となり給ふ。　（高野本平家物語・巻11・30-平家1250_11009,10500）

中世前期から後期にかけては大きな変化はないが、「おろか」が取る形態において、「おろか＋コピュラ」以外に「おろか｛な／の｝こと（＋コピュラ類）」が新たに見られる。

（15）　a. 形見こそ中々今は徒なる事よと言うて、伏しまろうで泣かれたれば、幼い人々も声々に泣き悲しまれた体、申すも疎かぢゃ［voroca gia］。

（天草版平家物語・巻１-８・40-天平1592_01008,18050）

b.「其事でござる、天下おさまりめでたいおりなれば、都のにぎやかさ、申はおろかにござる（虎明本狂言集・二千石・40-虎明1642_02013,7960）

(16) a. その体哀れなと言うも疎かな事で御座る［yŭ mo vorocana coto de gozaru］。（天草版平家物語・巻１-３・40-天平1592_01003,46700）

b.「されば其事でござある、天下おさまりめでたきおりなれば、男女によらず、月見の花見のとあつて、あなたへは、ぞろり〳〵、こなたへはぞろり〳〵と仕て、にぎやかさ申もおろかな事でござる

（虎明本狂言集・坊々頭・40-虎明1642_02016,1140）

## 2.4. 近世

近世前期に至ると、現代語と同様の構成要素から成る例が現れる。浮世草子・噺本類には、中世後期に見られた「N（は）言うもおろか」と同様の形を取りつつ、「おろか」がコピュラを伴わず、後続部に比較対象が示される例（17）があり、その後、近松・海音浄瑠璃では、世話物・時代物を問わず、発話動詞を伴わない例（18）も見られるようになる。[(7)] こうした例において主題化される名詞句は、中古・中世に見られた例とは異なり、その語自体が明示的な尺度を表すものではない。この段階に至って、「～はおろか、～」構文が成立したものと考えたい。

(17) a. かの人聞召、もつともそのほうのおほせあるとをり、かやうに豊なる御代なれば、上々かたは申もおろか、たみ百しやうあきんどまで、あんらくにくらす事じや。（宇喜蔵主古今咄揃・鹿の咄蔵［1678刊］41-５）

b. そののち、菊屋申は、此ふるき戸帳を申うけ、京の三十三所の観音へかけたきといへば、安き事とて、つかはしけるを、残らず取てかへる。此唐織、申もおろか、時代わたりの柿地の小釣、浅黄地の花兎、紺地の雲鳳、其外も、模様かはりぬ。（日本永代蔵・巻３［1688］12オ13）

(18) a. オオそれ〳〵。お蝶の父の言やる通り、一を打つて万を知れ。琉球屋の新兵衛様といふては、お国はおろか。筑紫九ケ国隠れない分限者に。餅搗く臼、杵持たずに、晒臼を兼ねるほどなしはん坊［≒けちん坊］。

（薩摩歌・51-近松1704_06002,7760）

b. 玉「…一度が定、おさん様に告げて、どこもかしこも紫色になるほど抓らせます。以春「アア、うるさや。と振り放す。どつこいやらぬ。本妻の悋気と饂飩に胡椒はお定り、なんとも存ぜぬ。［つねられて］紫色はおろか、身内が樺茶色になるとても君故ならば厭はぬ

（大経師昔暦・51-近松1715_23001,17670）

c. さあらぬ詞やはらげて。岩木はおろか真綿の我ら。ふはと心はうかるれどもしいた跡へ奥が来て。扨は外えの悪性と悋気のかほばせ見る様な。いかゞせんと有ければ、…　（日本傾城始［1720演］237-１）

d. はだかはおろか水のそこ氷のうへにねるとても。ねがいさへ叶ふならつかへに針をすることし。殊更もつて女郎は殿ゆへ恥もいとはぬと。

（傾城国性爺［1735演］318-13）

また、この構文で「おろか」が取る形態については、「おろか」が単独で用いられるもののほか、（16）と同様の「～はおろか｛な・の｝こと、～」も同時期に現れる。『日本国語大辞典』の「おろか」の項には、「（（ニ）［稿者注：「と言えばおろかなり」類の項］の表現が変化して「…はおろかの事」「…はおろか」の形をとったもの）…は言うまでもなく。…どころか。」として、（19c）の「～はおろかのこと、～」と、『坊っちゃん』の「～はおろか、～」の 2 例が挙げられているため、一見、前者の「おろかのこと」の「こと」が脱落して「～はおろか、～」構文が成立したようにも見えるのだが、そのような派生関係にはないようである。[8]

（19）　a. 冥加ないとも忝いとも、お前に礼を言ふ言葉日本はおろかのこと、唐、天竺にもよもあるまい　（博多小女郎波枕・51-近松1718_04003,22720）

b. 現世の逢瀬かなはずは。刃に死してこの世を去り。極楽、諸天はおろかのこと、たとへ地獄の底までも。誘へ、伴へ、連れだてと。

（けいせい反魂香［1708演］236-２）[9]

c. この小むつを置き去りに親子夫婦四人連れ。唐へ身代引く気ぢやの。あんまりむごいつれない。なんの見落ち仕落ちがある。唐高麗はおろかの事、天竺雲の果てまでも。ともに連れんと言ひ交した二人の仲。

（国姓爺合戦［1715演］285-11）

d. 一けをすてゝうかれ出ならさんがいはおろかな事。ゑぞ松まへのはて迄もともにつれんといゝかはした。　（傾城国性爺［1717演］308-７）

なお、現代語の「～はおろか、～」の構文は、「Y は否定形式であるか、または、形式的に否定でなくとも…何事かの不実現を表わす述語であることが多い」（服部2006：190）、「「肯定的格上げ」の「はおろか」文を不適格であると判断する人もいる」（澤田2006：248）など、否定的述語との呼応に偏ることが指摘されている。近世には（17）（18c）（19b-d）など、主節が肯定的述語となる例も一定数見られ、否定的述語との結びつきが強くなるのは、近代以降のことかと思われる。

## 3. 小括

以上に述べたことを、「～はおろか、～」構文の成立の前段階と成立後を対比して述べる形で、一旦まとめておく。

まず、中古・中世の「おろか（なり）」においては、形容詞文や、それに準じたスケール性を持つ動詞文が主題化されていた。こうした要素はいずれも一定のスケールに直接言及するもので、「おろか」は「そのように表現するのでは不十分である」ことを表すものであったが、近世に至ると、明示的なスケールを持たない名詞句を取る例も現れる。

主題化の方法は、まず引用構文によるかどうかが大きく異なり、中世までは、「発話・思考動詞＋条件形」や「引用助詞＋は」など、中世には「名詞句（は）言うもおろかなり」が用いられており、近世に、名詞句を直接「は」で主題化する例が現れるようになる。

「おろか」の形態は、「おろか＋コピュラ（終止形）」が、単独の「おろか」へ移行する流れがある。すなわち、「おろか」においては、漢語系の副詞に見られる「に」などの脱落のプロセス（濱田・井手・塚原 1991、鳴海 2015 など）は想定できない。「おろか｛な／の｝こと」も見られるものの、「～はおろか、～」構文が「こと」の脱落によって生じたものではないことも、併せて述べた。

対比される要素の有無は、主題化される要素の推移と連動しており、明らかな対比項が示される例は近世以降に現れる。ただし、中世前期にも（13）のように、「おろか（なり）」の直後に、より重要な情報が提示されることはあった。これは、「不十分である」ことの含意が明確である場合には後続部を要しないが、単に「程度が大である」だけでは表現意図が満たされない場合にはその叙述が後続部で行われ得るということに起因しており、語が元来有する意味そのものが、後続部を導きやすい性質を持つことを意味している。

以上を踏まえると、「おろか（なり）」の後続部に対比的な要素が現れることは、「おろか」の語彙的意味に求めてよさそうであるが、一方で、近世になって初めて、「おろか」がスケール性の明示的でない名詞句を取るようになる点や、コピュラを伴わずに中止して従属節を構成するようになる点は、前代と断絶がある。次節では、「～はおろか、～」構文成立の外的な要因として、意味・構文が似る「もちろん」からの影響があった可能性を検討する。[(10)]

## 4.「もちろん」の影響

「もちろん」については、その漢字表記である「勿論」を主な対象とした、髙橋・東泉（2019）による調査がある。現代語の「もちろん」と同様の用法、節末・文末における名詞述語用法（「～勿論也。」など、(20a)）が早く現れ、副詞的用法が遅れて見られるといい、文学作品（岩波書店『日本古典文学大系』DB）では、副詞の例として仮名草子の例（20b）が、「～はおろか、～」と同様の構文で副詞節を構成する用法（「尺度含意用法」とされる）として浮世草子の例（20c）が挙げられている。

(20)　a. 又今度山門ノ御訴訟、理運之条、勿論ニ候。御聖断遅々コソ、余所ニテモ遺恨ニ候へ。（延慶本平家物語・第１本・95-５）

b. 良い気質なる物［略］主・親方の事は勿論人譏らず（犬枕［17C初か］髙橋・東泉2019：136）

c. 一人楽しむ閨の銭箱。枕外れて夢結ぶ内。盗人に出合い。銭箱は勿論着替まで（新色五漢書［1698刊］髙橋・東泉2019：136）

抄物にはそれより早く、文副詞の例（21a）、副詞節を作る例（21b）がそれぞれ確認でき、近松浄瑠璃にも、副詞節を構成する例が見られる。

(21)　a. 父兮生我　母兮鞠我［父我を生む、母我を鞠（やしな）ふ］…母こそ生、父は生ぬが、血気をうくる程に、生だと云たまでぞ。母の養は勿論、乳をのませて養程にぞ。（毛詩抄・巻13・３-157）

b. 満室堆席［室に満ち席に堆（うずたか）し］家ノ中ニモ々チロン　ムシロタヽミノ上ニモタントアルナリ（句双紙抄・４ウ）

(22)　a. 下立売を堀河へ引き回したる角屋敷。刀屋石見某とて、諸役御免の受領職。折紙太刀の御用まで、御所はもちろん、屋敷方［まで務めている］。（長町女腹切・51-近松1712_09001,1140）

b. 幼少より他国に育ち。当御代の御風儀知らぬは理り。料理はもちろん。衣類、諸道具すべて、無益の費えお嫌ひ（心中宵庚申・51-近松1722_21001,18140）

抄物の例よりさらに遡って、古記録・古文書にも「もちろん」が副詞節を構成すると思しき例があり、(23) では、「もちろん」（勿論）が「也」「候」などの明示的な文終止形式を伴わず、かつ、対比的な事態が後続部に現れている。(23a-c) では「勿論」が訓読された可能性も残るが、[11] (23d) のような仮名書き例も存する。ここでは、成立時期が先行する「～はもちろん、～」に、意味が類似する「おろか」が置き換わる形で「～はおろか、～」構文が生じた可能性を指摘しておきたい。

(23)　a. 二罪以上倶発者、以重可論之条勿論、所詮云以前罪条、云此沙汰、一度ニ可有仗議歟、　（民経記・文永 4 年11月 6 日［1267］）

b. 抑親房朝臣一昨日・両度召具水干舎人二人、□色、古サマハ勿論、建長制符以後無此事、是大納言入道今案歟、随分刷由也、

（実躬卿記・嘉元 3 年 1 月 6 日［1305］）

c. 一季居之事、堅被停止之上は、侍之儀は勿論、中間、小者に至迄、於拘置は、速可被処罪事、　（御当家令条・巻29・373［1612］206-下 9）

d. 又水様（水谷左衛門大夫）々之むほん数通之せうもん（証文）不思義ニ取候而、過十五しやうかい（生害）いたさせ候、そのミさたの（身）（沙汰）かきり（限）ハもちろん、如此之条、無面目、自他之覚所存之外候、　（戦国遺文・下野編 1 ・永禄 5 ［1562］668号）[12]

## 5. おわりに

以上、本稿では、「～はおろか、～」構文の成立について、その前段階である「おろか（なり）」まで遡って考察を行った。この「おろか（なり）」を含め、「さら（なり）」「もちろん」など、主題化される要素がある尺度上の基準を十分に満たさないこと、もしくは過度に満たすことを表す語は論理的・語用論的な含意を生み、後続部を要求し得る。語彙的意味がいわゆる「不十分終止」の起こりやすい環境を生み、その結果として、中古の（10）「さら（なり）」や中世前期の「おろか（なり）」の（13）の例などが従属節と同様の機能を擬似的に持つと考えると、これらの例は、間接疑問文や命令形による条件文と同様、完結した節の並置によって従属節が生じるパターンに位置付けられる。他方で、近世以降に見られる「～はおろか、～」構文はそれまでの例とは断絶があり、「おろか（なり）」内部の発達だけでなく、意味的に類似し、先行して副詞節の用法が確立している「もちろん」からの影響を考える必要がある。

「節の並置が節連結へと発達する」という変化は、英語における that のような、指示詞と同一形態を取る補文標識を典型的な事例とする、以下の parataxis-to-hypotaxis の仮説（Givón 1979; Hopper and Traugott 2003; Heine and Kuteva 2007 など）がよく知られている。

(24)　a.

| parataxis | > | hypotaxis | > | subordination |
|---|---|---|---|---|
| -dependent | | +dependent | | +dependent |
| -embedded | | -embedded | | +embedded |

（Hopper and Traugott 2003: 177）

b. ［$S_1$ + Demonstrative］［$S_2$］ e.g. I understand that: ［He will come］.

> $S_1$［Complementizer + $S_2$］e.g. I understand［that he will come］.

（Heine and Kuteva 2007: 241）

これに対し、Harris and Campbell（1995: Ch.10）や Weiß（2020）は、指示詞系の補文標識が既存の従属節の形式の置き換えによって生じたものに過ぎず、(24) の仮説が補文標識の純粋な成立を説明し得るものではないことを指摘する。本稿で扱った「～はおろか、～」構文も、このような置き換えの関係が想定されるものである。[13] 個別の形式・構文の歴史的な記述が、類型論的な観点に資するところは大きく、今後もなお、記述・理論の両面から考えたい。

注

（1）小柳（2019）は、副詞が形成される統語的な条件に「連用修飾機能の獲得」があることを述べ、その方法・プロセスに「（名詞からの）連用修飾語の造語」（～に、～と、重複など）、「挿入句経由」、「連体修飾句経由」があることを論じている。「おろか」は名詞ではなく、後述するように、「～はおろか。」というような挿入句も古代語には見られないので、副詞の統語的条件から見ても異質である。

（2）澤田（2006）も、「～はおろか、～」や「～どころか、～」の前件が既存命題であるという制約を持つことを指摘している。

（3）後者の情報価値が前者に比して高いことは、記事のタイトルからも読み取れる。検索は BCCWJ によるが、ここでは元記事（https://ameblo.jp/myokazu2005/entry-12509850228.html, 2024年 4 月 1 日参照）を引用し、私に行数を付した。

（4）これは無論、同時期の「さら（なり）」や中世以降の「おろか」との相違点を、現代語の「おろか」と対照して考えるための説明であって、当期の「おろか」にも後続部が現れるべきである（あった）ということを主張するものではない。

（5）このほか、『枕草子』には名詞「ことわり」が後続部と意味的な関係を持つ例もある。

(i) されど、わが得たらむは<u>ことわり</u>、人のもとなるさへにくくこそあれ。

（枕草子・244・20-枕草1001_00244,860）

（6）「漢字表記を期した意識的欠字で、「アキレ」などが擬せられるか」（『新編日本古典文学全集』p.510頭注）に従う。

（7）湯澤（1936：236）は近世語の副詞の用法の一つとして「述語として文を終止するに用いられる」ことを挙げ、「「もとより」「おろか」などは、言い切らずに、「言うまでもなく」の意味で下に続くことがある」と述べる。

（8）前代までに見られた「～言えばおろかなり」類と同様の意味でコピュラを伴わない例も、数例ではあるが拾うことができる。

(ii) 大臣「つねの物日でさへりちに居るは悪かろ。まして正月の、節句の、七月などはきのどくに思やろが、なんと其日をつとめてやるはうれしいか」はつせ「いわんすが管でござんす。つねの紋日でも、お茶でいますれば、憂きもつらきもとゞめる事でござんす。まして<u>正月や節句、七月はいふはおろか</u>。嬉しうなふて何としましよ」

（難波鉦・巻 1 ・大番［1680刊］42-6）

(iii)「されば　此おやしきの　おひめさまが。けふはおふくろさまの三ねんきじやによつて　おはかまいりなされ。おかへりをみた。それは〳〵うつくしいといふはおろか。われにみせたらめをまはそふ」　（相州亀谷一本鑑［1714刊］17-３）

（９）海音浄瑠璃にも以下の類例がある。

(iv) げんぜのあふせ叶はずば。やいばにして此世をさり。ごくらく諸天はおろかのことたとへ地ごくのそこ迄も。さそへつれだてともなへと手に手をとつてゆくもかへるも。あふさかのせきも此身はとゞめゑぬ。（鎌倉三代記［1716演］228-６）

(10) 例（10）に示した「さら（なり）」は、近世以降の「～はおろか、～」構文とも用法がよく似るが、CHJ室町時代編には例がなく、『日葡辞書』にも副詞の「さらに」（Sarani, 邦訳p.558R）が立項されるのみで、「さら」単体での立項はない。中世後期には既に形容動詞としての「さら（なり）」は口頭語では衰退していたものと見られ、「おろか」への継承関係は想定できない。

(11)「もちろん」は、「理不尽」「注進」などと同様に、「勿論」という漢字列の音読によって生じた和製漢語（佐藤 1983）と見られるが、連用修飾の機能が（漢字列としての）「勿論」か、音読漢語として成立した「もちろん」のいずれの段階において獲得されたものか、現段階で論ずる準備を持たない。

(12) 山本久氏（東京大学大学院）の教示による。

(13) 構文の成立に際してこのような置き換えの関係を想定するのは特段珍しい見方ではなく、例えば野村（2002）が、「や」による係り結びの成立について、「カと意味においてよく似たところのあるヤが、何らかの形でカのあるべき場所に交代的に侵入」（p.32）したと推定するのが好例であろう。

## 引用資料

引用に際して、出典のページ数・行数（国立国語研究所編のコーパスによるものは用例のサンプルIDと開始位置）を示した。

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ, ver. 2021.03. https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/）.

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（CHJ, ver. 2023.3. https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/）のうち、『平安時代編Ⅰ』『鎌倉時代編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』『室町時代編Ⅰ・Ⅱ』『江戸時代編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』.

東京大学史料編纂所『古記録フルテキストデータベース』https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/.

延慶本平家物語…北原保雄・小川栄一編（1990-1996）『延慶本平家物語』勉誠社.

毛詩抄…倉石武四郎・小川環樹・木田章義校訂（1996）『毛詩抄 詩経』岩波書店.

句双紙抄…来田隆編（1991）『句双紙抄総索引』清文堂.

御当家令条…石井良助編（1939）『近世法制史料叢書 第２』弘文堂書房.

戦国遺文…『戦国遺文 下野編第１巻』東京堂出版.

日葡辞書（邦訳）…土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳 日葡辞書』岩波書店.

宇喜蔵主古今咄揃…『噺本大系』東京堂出版.

日本永代蔵…『新編西鶴全集』勉誠出版.

けいせい反魂香、国姓爺合戦…『新編日本古典文学全集76近松門左衛門集（３）』小学館.

日本傾城始、鎌倉三代記、傾城国性爺…『紀海音全集』清文堂出版.
難波鉦…『色道諸分難波鉦 遊女評判記』岩波文庫.
相州亀谷一本鑓…『元禄歌舞伎集続』古典文庫.

参考文献

我妻多賀子（1991-1995）「オロカとオロソカ（その一～五）」『学習院大学上代文学研究』16-20.
石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店.
河辺名保子（1960）「「おろか」の意味」『学習院大学文学部研究年報』6, pp.35–64.
北﨑勇帆（2018）「順接仮定条件的に用いられる命令形式の成立と展開」『国語国文』87（5）, pp.43–55.
北﨑勇帆（2019）「命令形式から条件形式へ」『国語と国文学』96（7）, pp.52–66.
小林賢次（1979）「中世の仮定表現に関する一考察―ナラバの発達をめぐって―」中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会（編）『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社, pp.297–322.
小柳智一（2019）「副詞の入り口―副詞と副詞化の条件―」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を拓く』くろしお出版, pp.305–323.
佐藤喜代治（1983）「和製漢語の歴史」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明（編）『講座日本語学 4 語彙史』明治書院, pp.70–89.
澤田治（2006）「「はおろか」構文・「どころか」構文に関する意味論的・語用論的考察」上田功・野田尚史（編）『小泉保博士傘寿記念論文集 言外と言内の交流分野』大学書林, pp.243–253.
髙橋圭子・東泉裕子（2019）「「勿論」考」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4, pp.128–138.
高宮幸乃（2004）「ヤラ（ウ）による間接疑問文の成立―不定詞疑問を中心に―」『三重大学日本語学文学』15, pp.124–110.
竹内史郎（2007）「節の構造変化による接続助詞の形成」青木博史（編）『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.159–179.
鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究―副詞化を中心として―』ひつじ書房.
西田絢子（1978）「「けれども」考―その発生から確立まで―」『東京成徳短期大学紀要』11, pp.49–60.
仁科明（2016）「助詞の史的変遷」中山緑朗・飯田晴巳（編）『品詞別学校文法講座 5 助詞』明治書院, pp.271–297.
野村剛史（2002）「連体形による係り結びの展開」上田博人（編）『シリーズ言語科学 5 日本語学と言語教育』東京大学出版会, pp.11–37.
服部匡（2006）「「～どころか」、「～どころで（は）ない」とその周辺の諸表現―あわせて、「ばかりか、～はおろか」等との比較―」藤田保幸・山崎誠（編）『複合辞研究の現在』和泉書院, pp.169–196.
濱田敦・井手至・塚原鉄雄（1991）『国語副詞の史的研究』新典社.
藤田保幸（2013）「「～はおろか」の統語的性格と表現性―「～はもちろん」との対比において―」『日本言語文化研究』17, pp.1–18.

山口堯二（1980）『古代接続法の研究』明治書院.
湯澤幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究 上方編』刀江書院.
吉田永弘（2000）「ホドニ小史―原因理由を表す用法の成立―」『国語学』51（３）, pp.16–29.
Cappelle, Bert, Edwige Dugas, and Vera Tobin. 2015. “An Afterthought on *Let Alone*.” *Journal of Pragmatics* 80: 70–85. doi: 10.1016/j.pragma.2015.02.005.
Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary Catherine O’ Connor. 1988. “Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of Let Alone.” *Language* 64（3）: 501–538. doi: 10.2307/414531.
Givón, Talmy. 1979. “From Discourse to Syntax: Grammar as a Processing Strategy.” In *Discourse and Syntax*, 81–112. New York: Academic Press.
Harris, Alice C., and Lyle Campbell. 1995. *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
Heine, Bernd, and Tania Kuteva. 2007. *The Genesis of Grammar: A Reconstruction*. Oxford: Oxford University Press.
Hopper, Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
Toosarvandani, Maziar. 2009. “The Relevance of Focus: The Case of *let alone* Reopened.” In *UMOP 39: Papers in Pragmatics*, edited by María Biezma and Jesse A. Harris, 105–123. Amherst: GLSA, UMass.
Weiß, Helmut. 2020. “Where Do Complementizers Come from and How Did They Come about?: A Re-Evaluation of the Parataxis-to-Hypotaxis Hypothesis.” *Evolutionary Linguistic Theory* 2（1）: 30–55. doi: 10.1075/elt.00014.wei.

付記

本稿は、令和６年度大阪大学国語国文学会（2024年１月６日）における講演「日本語史における節連結の類型」の一部を発展させ、「通時コーパス」シンポジウム2024（2024年３月10日）において「副詞的に機能するコピュラ文―「～はさらなり」「～はおろか（なり）」―」として発表したものに基づきます。また本稿は、JSPS科研費「原因・理由節を中心とする日本語従属節の史的変遷」（JP23K12192）、国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」の成果の一部です。

（きたざき・ゆうほ　本学准教授）